

ホトトギス

七月号

ホトトギス

創刊 明治二十三年三月十八日
昭和五年七月一日発行
十六巻第七号



風雅の小筥（六十五）

廣太郎

このホトトギス社の事務所の変遷、書き始めてからはそれほど多くの事を書くとは思っていなかったが、やはり百年以上の歴史の中では色々な事柄があるものだ、つくづく感じていた。

そんな事で、前回東銀ビルが停電になった話題であったが、それも原因があるのかどうか、その後程なくして、又オーナー会社から移転の話が持ち上がったのである。聞いてみると、東銀ビルも建替えをするという事であった。こちらもオーナー会社の都合という事で、移転費用等はホトトギス社が負担しなくても良く、そして経緯は今となっては思い出せないが、場所はぐんと良くなり、「三菱ビル」という、東京駅丸の内南口から出て、何と丸ビルの南隣という願っても無い立地にあるビルの十階である。平成十八年九月四日からこの新しい事務所で営業を始める事になった。ここで又問題となるのは、以前から話題になっていた「ホトトギス社」と書かれた虚子の筆跡である。丸ビルのドアのガラスは額装して、勿論三菱ビルの事務所に持って行き壁に掛ける算段であったが、このビルのドアは全面強化ガラスで出来ており、なかなか洒落たデザインなのである。そのガラスに又職人さんが又なぞって書く事を想像していたが、今回は全く違い、丸ビルのガラスに描かれた筆跡を画像としてスキャンするのである。そしてそれをそのままガラスに写すという方法である。職人さんの技も高度なものである。世の中の発達を目の当りにしたのであった。

旬日記 廣太郎

令和四年七月二日 有恒俳句会選者吟

梅雨に入る庭は虚しく遺されて
俯きて主を探すえごの花
犇めきてひしめきてえご散りゆけり
万物を立ち上がらせて梅雨入かな

七月二日 芦屋ホトトギス会

三瓶野に悌残し合飲の花
伊吹嶺の稜線磨き青田風
夏館遺影は永久に微笑みて

七月三日 青嵐会芦屋例会

稜線を丸く仕上げて山晩夏
夕菅や三瓶に綴るエピローグ
陰と陽繋ぐ分水嶺晩夏
これよりは孤高の句碑を守る黄菅

七月四日 カトリック新聞選者吟

あの人 の 悌 綴 る 虹 の 橋

七月六日 NHK文化センター

摩天楼縮こまりたるはたたがみ
地下を出る先づハンカチを握りしめ

木下闇 街路樹といふ静寂に

七月七日 蕉心会

水無月の水辺に立てば水の歌
曇天といふ涼しさに鳥語降る
紫陽花の疲れ切つたる終の色
朝風の都心は時を止めてをり
漣は命の鼓動露涼し
鯉跳ねて涼しく破る水の黙

七月十一日 朝日カルチャー若草句会

登山帽皺に歳月秘めてをり
白百合や大聖堂の落着きに
大夕焼一番星を遠ざけて
鬼百合の山気放てる孤高かな

七月八日 工業倶楽部

青田風富士の裾野を洗ひ上げ
夏館開かずの間にも風入れて

七月十二日 きさらぎ会

赤富士や老柳荘に主亡く
日覆を外して星を招き入れ
日除して三百年の老舗守る
日除して猫の天地となりゆけり

七月十四日 十筆会

黄菅野に句碑は遺墨となりにけり
青鷺の立つより池の引き締まる
夕菅や一番星と対話して
梯を探す三瓶の夕菅に

七月十五日 廣邦会選者吟

曲りたる胡瓜に山気漲れる
子規も来し四万六千日の縁
胡瓜挽ぐ雫大地を潤して

七月十五日 浜田吟行会

懐かしき山河変らず万緑裡
雲の峰抜け山陰の明るさに
片陰に寄れば石見の風甘し
その中に蚊遣火といふもてなしに
曇天を発ち炎天の石見かな

七月十六、十七日 石見ホトトギス大会

除幕せし日の梯に句碑涼し
夏館句碑の暦日刻みつつ
青芝を蹴つて子牛の立ち上る
山雨急万緑に色足してゆく

七月十九日 大阪倶楽部選者吟

句心をビール泡に解きゆく
夕焼や三瓶これより星の宴
夕焼の果より君の現れさうな
二人には明る過ぎたるピアホール

七月二十日 北國文芸選者吟

句碑洗ひ上げる刹那や大夕立

七月二十一日 前議員句会

官邸に喪心集め露涼し
夜の秋官庁街の鎮もれる
香水を替へて乙女に戻りゆく

七月二十一日 登高会

ナイター之余韻吐き出す甲子園
ナイターをつけつ放しにして熟寝
ナイターに進む秘蔵の地酒かな
ナイターや夫は阪神妻巨人

七月二十二日 有恒俳句会選者吟

夏館丑三つ時に鳴る時計
トマト切る為の包丁別にあり
夏館遺影に留守を頼みもし
昨夜星と語りし色のトマト挽ぐ

七月二十六日 若水句会選者吟

甚平を着るより夫の顔となる
青山椒母は小言ををさめけり

七月二十七日 目黒学園句会

夜の秋街騒丸くをさめけり
鮎鮓の香に咽びたる堅田駅
大琵琶を使ひ切つたる船遊

七月二十四日 青嵐会東京例会選者吟

青田波都市の一画彩れり
主亡き月下美人の孤高かな
庭園の一步万緑被さり来
登山小屋地震に戦く夜中かな
登山口明けの明星指呼にして

七月二十九日 不動の庭で遊ぶ会

一山の祈りとも聞く蟬の声
兜虫不動の土に還りゆく
風音に水音に秋近きこと
啼くものの声くぐもりて晩夏かな
万緑の濃き方へ風貫ける
万緑の上蒼天の上星

七月三十、三十一日 野分会夏行

俳聖を身近にしたる館涼し

天守閣令和の風を呼ぶ網戸
戦国の語部として泉湧く
城涼し西軍勝つて欲しかつた
繋がれし鵜舟は昨夜の余韻乗せ
扇風機あれば葉流さん突進す

雑詠 廣太郎 選

汀子忌や十七音にある祈り 神戸 涌羅由美
 風の譜に光の音符春立ちぬ 同 同
 初つばめ青の一閃翻し 同 同
 句碑も生れ遺愛の雛も在す館 西宮 本郷桂子
 歳月の師の心抱く雛の魂 同 同
 新しき句碑の言霊梅椿 神戸 和田華凜
 ありし日のあの方思ふひひかな 同 同
 遠き世を見つめてをりぬ享保雛 同 同
 二つ三つ吉野の桜餅なれば 同 同
 空といふつながり汀子忌の空よ 大阪 酒井湧水
 句座重ね重ねて汀子忌を修す 同 同
 汀子忌の今日祈ること誓ふこと 同 同
 寒明の空あけわたすオリオン座 龍ヶ崎 今橋眞理子
 点描に始まる庭の春浅し 同 同
 天上の雲おしひらき鶴帰る 同 同
 紅梅に佇てば偲ばれ師の笑顔 長岡 安原 葉
 紅梅を説かれし汀子師の笑顔 同 同
 もう仰ぎ得ぬ汀子選鳥雲に 同 同

臘梅に日差し透けるも留まるも 横浜 高浜礼子
 森親し鶯の声聞きしより 同 同
 折り返す梅の香りのする方へ 同 同
 神還りたる蠟燭の火の揺れに 静岡 須藤常央
 猫よりも丸く毛布にくるまりぬ 同 同
 毛布掛けくれしは君かソフアーに寝 同 同
 寒明くる鳴り止まぬ風ありながら 袋井 湖東紀子
 神話より国は生まるる紀元節 同 同
 枝先に兆す紅春の雨 同 同
 十薬に池囲まれてしまひけり 東京 今井肖子
 白服を映して水の濁り初む 同 同
 草色の水輪広がる水馬 同 同
 七盛の墓落椿落椿 神戸 山田佳乃
 春雨に濡れて港の一過客 同 同
 出航の汽笛一声寒明くる 同 同
 初場所の最負力士にまたも土 熊本 岩岡中正
 春塵を払ひ一稿起こしけり 同 同
 街道に二里木三里木日脚伸ぶ 同 同
 強東風や岬の馬は脚太し神戸 神戸 藤井啓子
 時折は雲と話して田を返す同 同 同
 着納めのセーラー服や花すみれ 同 同
 百歳の賀といふ女性初桜 東京 今井千鶴子
 考へることなき暮らし初桜 同 同
 やはらかく東京包みゆく桜 同 同

雑詠句評（六月号より）

醪つぶやき酒蔵の寒明くる 奈良 古賀しぐれ

もろみは醸造してまだ粕を濾す前の状態のものを言う。麴が活き活きと、沸々と息づいている状態を作者は「つぶやく」と擬人化して詠まれた。ご実家が近江の老舗酒蔵であるから、醸造過程を知り尽されているからこそ、この時期を将に生き物のように捉えられたのであろう。

寒明けには芳醇な香りの初しぼりの酒に出合える。左党にはたまらない季節なのだ。（さい雪）

様々なプロセスを経て造られる日本酒は寒造が味が良いと聞いた事がある。酒を醸している過程で、醪が発酵して呟くような音がした頃寒明の時期となるのである。酒造の美しい伝統が垣間見られる句である。（廣太郎）

寒紅をさす別れ告ぐその前に 神戸 和田華凜

大切な人との永訣を思わせる。葬りへ出かける朝、鏡の中の自分へきりと寒紅を引く。それは、心を立て直し、今後へ向かう覚悟を決める時間でもある。「その前に」という措辞がそんなこと

を想像させる。「寒紅」、「別れ」というドラマティックな言葉が並ぶが、しんとした心情が底を流れていることが伝わる。（千種）別れを告げなければならぬ人が居た。この行為はなかなかネガティブなものがあつて、あまり気乗りはしないだろう。しかしそんな気持があつても身だしなみは整えなければならぬという作者の高貴な心持が伝わってくる。（廣太郎）

夫と来し道はこの道落葉舞ふ 横浜 小川みゆき

御夫君は昨年秋にご逝去された小川龍雄氏。訃報が届いたときの驚愕を昨日の事の様に思い出す。

とても仲良しのご夫婦でした。淡々と「夫と来し道」と詠み、そうだ「この道」だと詠まれているだけで、深い心情が溢れんばかりである。その上落葉が舞っているのが、同じ道の同じ風景を思い出させて、御夫君を偲ぶ心をより深くさせる。

ご夫妻共に親しくさせて頂いた筆者としては、句の底を漂う作者の悲しみを少しは受け止められもし、お偲びする事が出来る。

（雅）

最愛の旦那様小川龍雄氏を亡くされた悲しみは察して余りあるが、その悲しみを乗り越えようと、生前の思い出を噛み締めておられる作者である。現実的な道というより、二人で研鑽した俳句

の道も感じる事が出来る。(廣太郎)

なつかしき夢を見てをり春の風邪 京都 山崎貴子

作者は風邪を引いて臥せている中で夢を見ている。「なつかしき夢」とは何の夢なのかを想像すると楽しくなってきた。

親子喧嘩か、兄弟姉妹と喧嘩した夢でも見ていたのであろうか。それとも、子供の頃に行ったことのある思い出の夢であろうか。友達と遊んだ懐かしい夢であろうか。この句からは、私自身の様な思い出も浮かんで来る。

風邪の中とは云え、春に見た夢であるから、さぞかし楽しい思い出の夢を見ていたのであろう。(紀元)

春の風邪は、軽いようで、なかなかしつこいものである。熱の中寝ていると、すっかり忘れていた何か懐かしいシーンが夢に出て来たのである。健康な時ではあり得ない不思議な気持ちになったのだろう。風邪ならではの気分である。(廣太郎)

みよしのの遙けき空よ若葉風 東京 今井肖子

吉野は関西に住んでいても、とても遠く感じる。簡単に人を寄せ付けない吉野は、数多の人が逃れきて歴史の舞台ともなった。

そんな吉野も今は桜の名所として人々に愛され、特に亡き汀子先生が殊の外愛されたところであった。

町中に若葉風が吹く頃、少し遅れて吉野は桜の見ごろを迎える。作者もそんな吉野の美しい桜を恋うておられるのだろうか。

若葉風を詠みながら、遠く吉野の桜の盛りをも想像させるような句となっている。(佳乃)

汀子生前の時「吉野くつろぎめ旅」として行われていた吟行に作者も毎年参加されていた。コロナ禍や汀子の死によって中断しているが、若葉の頃ふと思いつかれたのである。再開を願う気持ちも季節から伝わってくる。(廣太郎)

爪先の遊ぶ水辺や春隣 香川 湯川 雅

水辺に降りてみると、まだまだ冷たい水でありながらどこことなぐ春の兆しを感じられる。爪先でちよつと水に触れたりするのもすぐそこに来ている春を感じてこそその事だろう。冬と春の狭間の季節感が爪先を通して描かれている。(紀子)

もうすぐ春が来るといふ季節の微妙なニュアンスが表現されている。水辺で遊ぶ子供たちは、未だ水の冷たさに、躊躇しているのではないだろうか。子供には限らないが、微妙な季節感が季節を通して伝わってくる。(廣太郎)